



- 日時：平成29年10月8日(日) ●会場：大阪府鍼灸師会館3階
- 講師：日本鍼灸研究会代表 篠原孝市先生

★医道の日本2017年10月号 『臨床に活かす古典No.65 交流』のお話より

意見の交流というのは条件がある。自分の意見を言うのは、意見の交流ではない。自分がやっているやり方を言っても、それは交流ではない。交流というのは相手と自分の共通の土壌の確認が最初になる。たとえば経絡治療家どうしが意見の交流をするには、診断の枠組み（六部定位診で診て経絡の虚实を決めるという事）の、どこがお互いに共通しているか、いないかを前提としてという事である。まず理論的なものをつめておかなければ、いくら臨床の話をして、無理である。そういう手続きが必要である。

- * - * - * - * -

★『素問』至真要大論篇第七十四注 第五十二章

帝（てい）曰く（いわく）、幽明（ゆうめい）何如（いかん）、と。

（訳）帝が尋ねた。「幽明とはどういうものか」

岐伯（きはく）曰く、兩陰（りょういん）交々（こもごも）盡く（つく）、故に幽（ゆう）と曰う（い）う）。

兩陽（りょうよう）、明（めい）を合す（ごうす）、故に明と曰う。幽明の配（はい）は、寒暑（かんしよ）の異（い）なり、と。

（訳）岐伯が答える。「兩陰（太陰と少陰）の気がすべて無くなった状態を幽という。兩陽（太陽と少陽）の気が一緒になった状態を明という。寒くなったり暑くなったりするのは、幽と明の配合された状態であり、幽明の配とは、寒暑の別の表現である」

（*解説1）ここでは、幽は厥陰（けっちん）と同じ意味である。寒くなって行く過程で、だんだん陰の気がついてくる。この状態が厥陰で、この時に陽の気が発生する。厥陰の気というのは、一番寒い時期であるが、陰の気が尽きてきて、陽の気があらわれてくる時期である。

（*解説2）陽の気が多い順に、太陽（三陽、陽の気をもっとも多い）・陽明（二陽）・少陽（一陽、陽の気をもっとも少ない）である。

（*解説3）「兩陽、明を合す」とは太陽と少陽の気の間にある状態をいう。陽明と考えれば良い。

（*解説4）一年の間で、厥陰は陽の気のはじまりの時期。陰の気がついた時期が厥陰。陽明は陰の気のはじまりの時期。陽の気がついた時期が陽明。

（*解説5）「兩陰交々盡く、故に幽という。兩陽、明を合す、故に明と曰う」この文章には二つの解釈がある。

・王冰（おうひょう）・張介賓（ちょうかいひん）の解釈

『靈樞』陰陽繫日月篇（いんようけいじつげつへん）にもとづく解釈である。この篇は、その月毎によって人の気というものは多少があり、人の気のありかたと鍼の刺し方について述べている。ただし、この部分は鍼の刺し方について書かれた文章では無いので、ここでは自然現象という意味で、他の解釈をとっておくほうが良いであろう。

・高士宗（こうしそう）の解釈

「秋や冬の寒い時期の果てに、両陰が交わりつくという厥陰の状態がはじまって春が始まる。その状態を幽という。春は温、夏は熱、暖かさや暑さというものがあって、その果てに秋が始まる、秋は陽明燥金の時期、その状態を明という」「時間が流れて行き、寒くなったり、暑くなったりする。これが幽明の配、幽と明が配合された状態であって、これは寒暑の別の表現である。暑さや寒さというものを観察することが出来れば、一年の間の幽と明の状態がわかる」

帝曰く、分至（ぶんし）何如、と。

（訳）帝が問う。「分と至とは、どんなものであろうか」

（*解説）「分」は春分と秋分、「至」は夏至と冬至のこと。

岐伯曰く、氣（き）至る（いたる）、之れ（これ）を至（し）と謂う（いう）。氣分つ（わかつ）、之れを分（ぶん）と謂う。至れば則ち（すなわち）氣同じ、分たれば（わかたれば）則ち氣異なり。所謂る（いわゆる）天地の正紀（せいぎ）なり、と。

（訳）岐伯が答える。「その季節の気が極点に達した状態を、至るという。気候の区分を分という。気が至った時は、季節と気候の変化が同じである。気が分けられると（春分と秋分の時期になると）、季節と気候の変化が違う状態となる。これが、正しい気のありかたである」

（*解説）方彙中（ほうやくちゅう）は、次のように解釈している。

夏の気が非常にさかんな状態を夏至という。冬の気の一番さかんな時を冬至という。気が至る時というのは、気候の変化と季節が完全に一致する。春から夏に転じていくから「春分」、気のありかたが陰から陽にかわる。秋から冬に転じるので「秋分」、気のありかたが陽から陰に変わる。

2017年は、3月20日（春分）、9月23日（秋分）である。

***『素問』の森を歩いてみませんか。毎月休まず第二日曜です。1992年6月14日（日）の第一回から年を重ねて二十六年目、一歩一歩ですが、着実な一歩です。**

（素問勉強会世話人 東大阪地域 松本政己）